岡山市埋蔵文化財センター定期講座
令和 4 年 10 月 15 日 (土)

南方遺跡の土器

寒川 史也

１．弥生時代のはじまり

近年は放射性炭素年代法が積極的に取り入れられるなど実年代にせまる資料が蓄積しつつあります。また、考古資料の内、土器は時間のものさしとして代表的なものでありますが、相互に研究成果の照らし合わせも行われています。その成果をみた場合、弥生時代の開始期における岡山県南部の状況はどのようなものだったのでしょうか。

２．土器について

土器は、当時の生活において貯蔵、煮炊き、配膳と様々な場面で使用され、墓に持ち込まれることもあります。

土器製作に関しては、粘土に混和剤の砂などが入れ、ひも状にしたものを順次積み上げていきます。土器の器面には製作時の痕跡が残されますが、代表的なものとしてタタキ (板状の工具とあて具を用いて叩きながら形を整える)、ハケメ (板状の工具でなでることで木目による数条の平行する線が残る)、ヘラミガキ (ヘラ状工具により平滑に仕上げる)、ヘラケズリ (ヘラ状工具で粘土をかきとり粘土の厚みを調整する) といった技法が成形・整形・調整の各段階にみられ、土器づくりの過程を復元する上で手がかりとなります。また、これらとは別に土器を飾るための文様として箆描文、櫛描文、凹線文が施文され、突帯なども貼り付けられました。文様は直線と曲線が組み合わさり、様々な表現が存在しますが、特に土器のつくられた詳細な時期を考える際、弥生時代前期から中期にかけての箆描文、櫛描文、凹線文といった文様の変化は重要なポイントです。土器は乾燥期間を経て焼成されますが、その方法は覆いをもつ野焼きといわれます。黒斑の付着の仕方から、当時どのようなシチュエーションで土器が焼かれたか、実験的に再現し検討されている例もあります。

３．南方遺跡の九州系土器

南方遺跡からは、九州系土器が多数出土しており、胎土分析でそれらは九州を故地とするものと分かってきています。弥生時代中期後葉においては、瀬戸内海を舞台に人の行き来の結果、それぞれの地域の土器の移動が活発化することは従来より指摘されています。しかしながら、南方遺跡の場合は、これとは少し時期がずれているようで、九州系土器は中期中葉のものが多く、それも南九州、大隅半島から宮崎平野にかけての範囲からもたらされたものが目立ちます。こうした土器の持ち込まれ方も地域間の交易のあり方が反映されています。

資料 1

歷年代			中国
BC 1000	縄文時代	縄文時代	
900	弥生時代 早期		西周
800			
700	前期		春秋
600			
500			
400		早期	戦国
300	中期	前期	
200			秦
100		中期	前漢
			新
100	後期	後期	後漢
200	終末期	終末期	
300 AD	古墳時代	古墳時代	魏・呉・蜀

表 1 関連年表

① 津島遺跡
② 南方遺跡
③ 鹿田遺跡
④ 北方長田遺跡
⑤ 百間川原尾島遺跡
⑥ 百間川沢田遺跡
⑦ 百間川兼基遺跡
⑧ 百間川今谷遺跡
⑨ 赤田東遺跡
⑩ 雄町遺跡
⑪ 赤田西遺跡
⑫ 加茂政所遺跡
⑬ 津寺遺跡
⑭ 吉野口遺跡
⑮ 足守川加茂 B・足守川矢部南向遺跡
⑯ 上東遺跡
⑰ 矢部堀越遺跡
⑱ 高塚遺跡

図 1 旭川・足守川流域の遺跡分布

資料 2

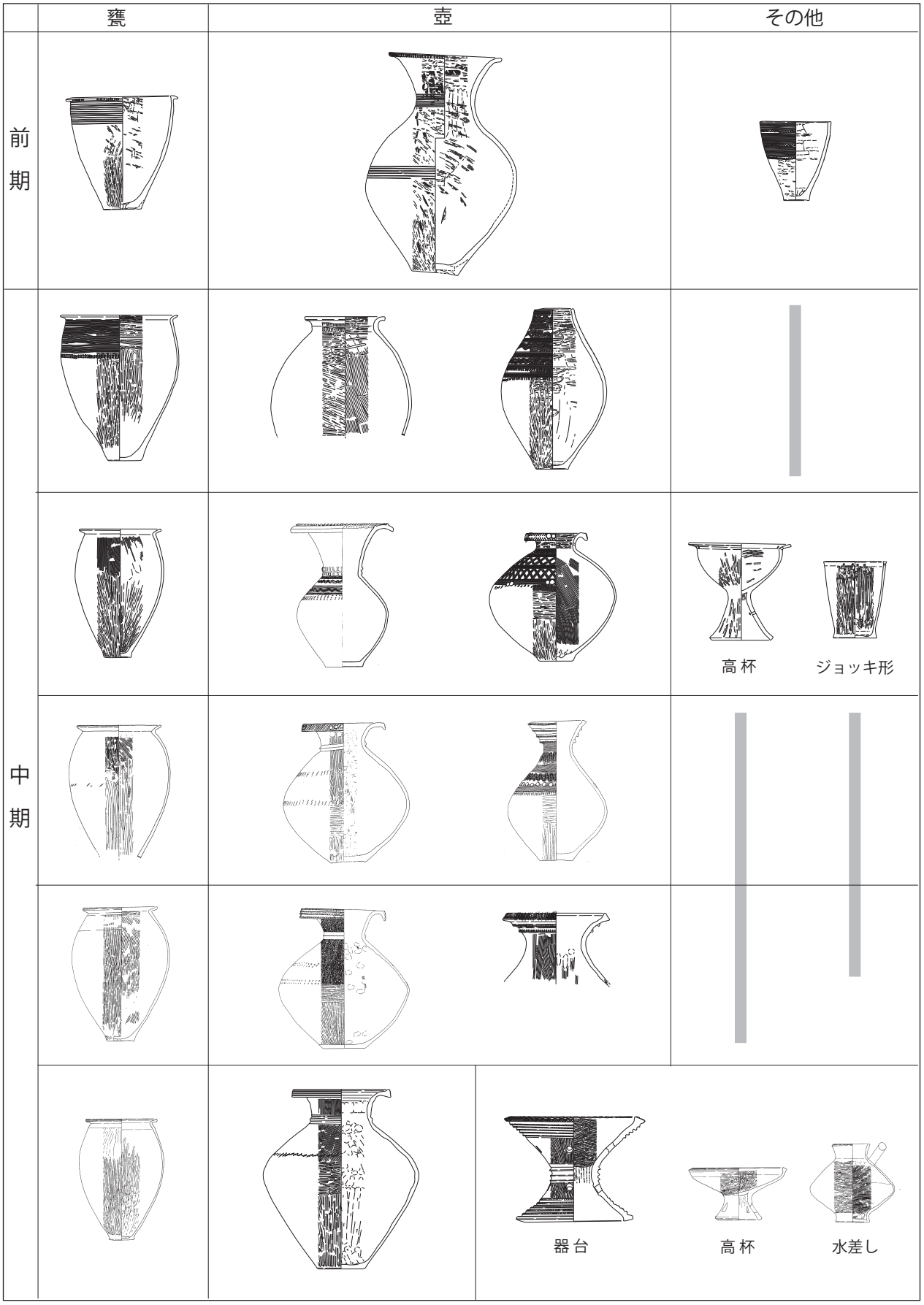

図 2 南方遺跡出土土器の編年

資料 3

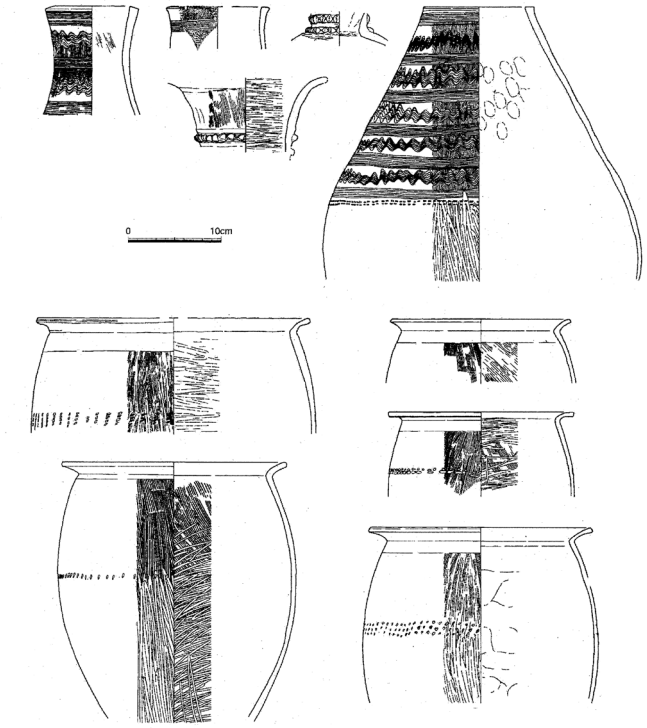

図 3 岡山県北部における弥生時代中期の土器

岡山県教育委員会 2004「久田原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』184
図面を一部改変

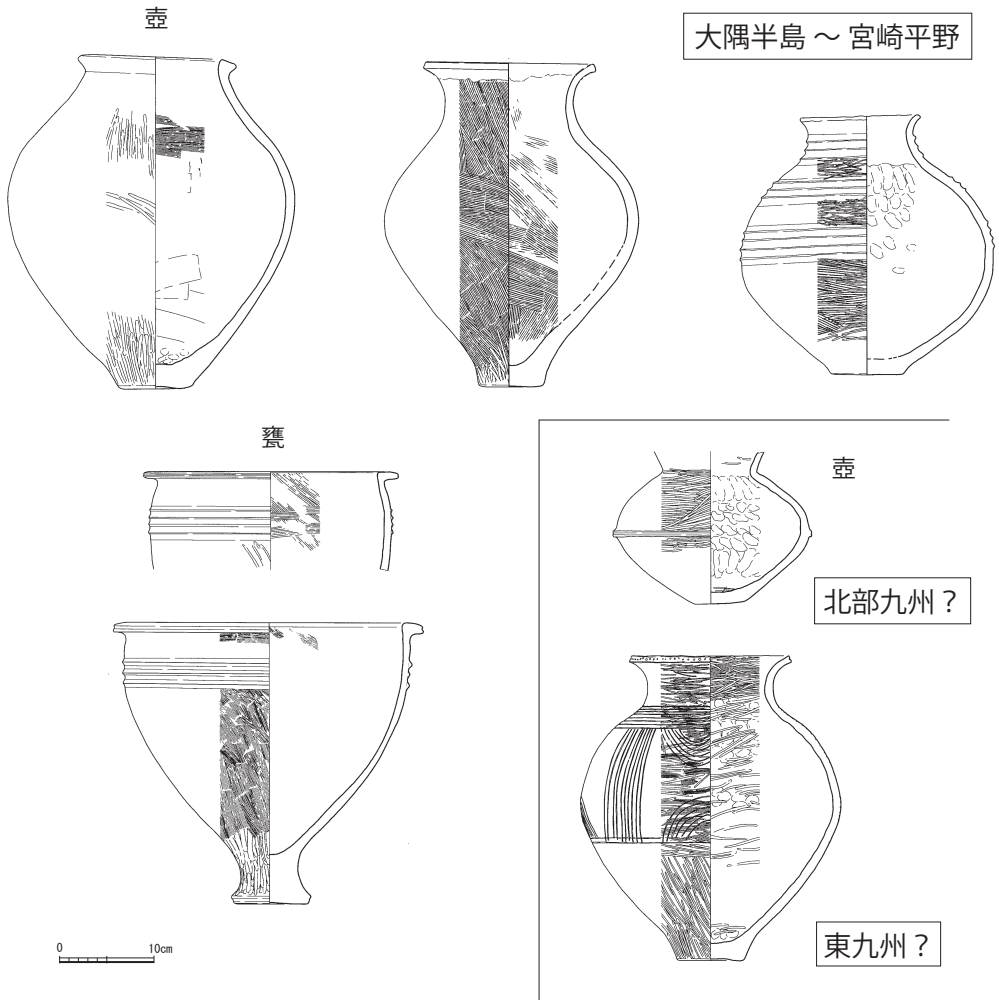

図 4 南方遺跡の九州系土器